

日本人の言葉による自己卑下的帰属と自己呈示の実証的研究

荻野 七重・齊藤 勇*

序 論

1 帰属における内心と言葉の不一致

本研究は、帰属プロセスについて従前から議論されている日本人の自己卑下的帰属傾向を課題として、内心と言語の不一致が印象操作のための自己呈示により生じることを実証的に明らかにすることを目的とする。その議論とは西欧においては達成課題の成否の原因帰属が自己高揚的に帰属される傾向にあるのに対し、日本においては達成課題の成否の原因帰属は自己卑下的に帰属される傾向にあるとされる点である。この議論は、さらに日本人のこのような自己卑下的傾向が心からの、つまり、内心からの自己卑下なのか、あるいは表面上の言語表現としての自己卑下なのかという議論に発展していくとうかがわれる。本研究は、齊藤（2003）の言行不一致の自己呈示論的考察に基づき、日本人の自己卑下的帰属傾向は、多く、印象操作のための自己呈示の表面的言語表現ではないかという考えをベースに進めていく。

通常、日本人の対人場面の会話は表向きが多いとされる。つまり、お互いに相手に発している言葉の内容が内心とは異なり、内心と言語が不一致のまま会話が進められていくことが少なくないとされている。日本文化はタテマエとホンネの社会と称されているが、その具体的な現象の一つとして社会的場面で発せられる言葉が内心と異なることが多いことが指摘されている。この場合、公に（外に）発言される言葉がタテマエ、本人の本当の気持ち、内心がホンネである。もちろん、ホンネで話す、という場面もあるが、あえてあらためてホンネで話すというくらい、それは特別の場合で、通常の世界生活ではホンネは出さずにタテマエで話しているということである。タテマエとホンネの社会といわれる所以は言うこと（タテマエ）と内心（ホンネ）がかなり異なること、時には正反対であることが容認される文化を持つ社会ということであろう。ただし、日本文化のみがこのようなタテマエとホンネを使い分けるわけではなく、どんな文化においても対人関係においては多

Nanae OGINO, Isamu SAITO : A study about the self-humble attribution of Japanese as interpersonal presentation

* Isamu SAITO : 立正大学心理学部 (Faculty of psychology, Rissho University)

かれ少なかれ、内心と言葉の不一致がみられる。そのことはDEPAULO and KASHY (1998) や欧米の諸々の実験的研究のデータにより明らかである(齊藤 2003, 齊藤・荻野 2003)。さて、なぜこのような内心と言行の不一致が生じるのかについては、齊藤(2003)で論じたようにその主要な要因の一つは、印象操作のための自己呈示であり、基本的には自己評価を高めるための自己高揚的自己呈示をするためであると考えられる。しかし、日本人は自己高揚の言語表現ではなく、自己卑下的な言語表現をするとされる。この点は注目すべき傾向である。この独自の傾向は、ある場面で、どのような言語表現が自己高揚的自己呈示となるのかはそれぞれの文化により異なるからであると推論することができよう。言語表現上は自己卑下的であったとしてもそれが実質的には自己高揚につながると考えれば、自己卑下的に自己高揚することは考えられ、この場合の自己卑下的帰属の自己呈示は自己高揚的自己呈示といえるのである。日本人において多用されている言語的自己卑下的表現は内心からのものでなく、印象操作のためで、内心とは異なる内容の言語表現であると考えることにより日本人の自己卑下的表現の多用の説明がつく。本研究では、自己卑下は、主に印象操作のための自己呈示のひとつのストラテジーから生じると考え、そのことを実証的に明らかにすることを目的としている。

さて、印象操作のための自己高揚や自己卑下の自己呈示が明確に言葉となって表われやすい場面として、たとえば日本の若者にとっての高校入試や大学入試などの自分の人生にとって大事な達成行動の成功・失敗場面の原因帰属についての発言が考えられる。自己中心性バイアスによる基本的錯誤傾向からその帰属傾向を推論すれば、入試に成功した学生は自尊心が満たされるように、より内的つまり自分の能力や努力に帰属し、他者にもそれを誇示しようと自己高揚的に自己呈示すると予測される。また、逆に入試に失敗した場合は自尊心が傷つかないように失敗の原因を自分以外のことに求め、自己防衛のための外的要因帰属を行なうであろうことが予測されよう。このような自己中心的な帰属は欧米の社会心理学的研究において帰属の自己奉仕的バイアス傾向と呼ばれ、帰属理論においては自尊心を維持するための人間の普遍的、基本的錯誤であるとされている。このような自己奉仕傾向は入試のように成功・失敗が明確な事態においてその方向性が端的に表われると考えられる。このため成功・失敗の帰属は自己呈示の研究の題材として適当であると考えられる。

ところで、実際に日本において、大学入試に合格した学生に、「よく受かったね」とその勝因を確認すると、「運が良かったんです」という答えが返ってくることが多い。この返答はWEINER (1980) の達成の原因帰属マトリックスからみると、勝利の原因を内的ではなく外的不安定な要因、つまり運に原因帰属していることになる。この帰属傾向は、自己高揚の帰属ではなく、自己卑下的といえる。逆に入試に失敗した人に「残念だったね」と慰めようとする、「私の努力が足りなかったんです」と、その敗因を自らの努力不足に帰属して、自らを責める発言をする学生が多い。これは失敗の原因を内的に帰属してお

り、WEINERの帰属マトリックスからみると明らかに自己高揚ではなく自己防衛的でもなく、自己卑下的原因帰属といえる。このような日本人の達成場面の帰属傾向については日常的に多く経験する。それだけでなく、社会心理学においても、実証的研究がなされており、欧米人は自己高揚的原因帰属をするのに対して、後に詳述するが、対照的に日本人は自己批判的傾向が強い原因帰属をし、自己高揚的ではなく、自己卑下的であるとされている（鹿内 1983, 北山・高木・松本 1995）。しかし、前述したように、日本はタテマエとホンネの社会とされていることから考えると、これらの日常的会話の自己卑下的表現や実証的調査への回答も言葉上に限られた自己卑下的表現であるという事も考えられる。もしもそうだとすると、これらの経験やデータからすぐには日本人は内心から自己卑下的であるとはいえないことになる。この自己卑下的表現が印象操作の自己呈示であると考えれば、言葉で自己卑下を表現するということを支持するデータではあっても、必ずしも日本人が本心から自己卑下的であることを示唆しているとはいえない。それは日本人が、日本の人間関係上、自己卑下的な原因帰属を言葉にするという自己呈示のストラテジーをとっているということを示すだけである。しかも、もしそのような自己卑下的言葉を発することが相手や社会に対して自己印象をよくすると考えて自己卑下的発言をしているとすれば、他者評価を通して自己評価をあげることを期待していることになり、結局は、自己高揚につながる自己呈示であり、単に印象操作上の自己卑下であるということになる。

さて、日本人の自己卑下的原因帰属がこのような自己高揚を背景に持っている自己卑下なのか、本心も言葉通りで本来の内心からの自己卑下なのかはこれまでの研究では直接比較して扱っておらず、明確ではないといえよう。そこで本研究は、達成行動の成否の原因帰属を内心と発言について直接的に比較することによって内心と言語の不一致、その不一致を生む印象操作のための自己呈示を明らかにしていくことを目的とする。そこで本研究の調査では、原因帰属の内心と発言を区分して調査し、両者の帰属傾向における内心と言語の不一致を調べることにした。

2 日本人の自己卑下的帰属傾向

日本における帰属研究者は、はやくから日本人の帰属傾向が欧米とは異なる点を指摘している。鹿内（1983）は、JONES and NISBETT（1971）の仮説と日本での実験結果を比較し、日本人は、自分の行動結果に関して高い評価を避け、控え目な帰属を表明するとしている。北山・高木・松本（1995）は、日本人を被験者とした研究をレビューして、日本人の帰属傾向は、自己奉仕的バイアスとは逆の方向にあり、それは自己批判的、あるいは自己卑下的な帰属傾向であるとしている。MARKUS and KITAYAMA（1991）によれば、人は自己を肯定的に評価しようとするが、何が肯定的かは文化により異なるとし、欧米型の独立的自己の場合、ユニークさ、自己主張が評価されるため自己高揚的帰属傾向が生じるが、他方、相互依存的自己をもつアジア型では、協調性が評価されるため、他者を高揚し自己を卑下

する帰属傾向が生じているとしている。村本・山口（1997）は、日本人は、自らについては自己卑下的帰属を表明するが、他方、自分が所属する自集団については集団奉仕的帰属を行うとしている。日本人は集団を通して自己高揚しているといえるかもしれない。

齊藤・遠藤・荻野（2000）は日本人を対象に、原因帰属の対象を自分自身の入試や恋愛だけでなく、好意的他者（友人）の入試や恋愛の成功と失敗についても調査を行なっている。その結果、好意的他者への帰属はきわめて高揚的であることがわかった。このように日本人は、友人という自分の仲間集団の一員に対する帰属はきわめて高揚的で、それは自集団奉仕的帰属であると推察できる。そのように考えると、この友人称賛は自集団高揚を通しての自己高揚であるともいえる。この理解にはこの友人称賛に社会的アイデンティティ理論（OAKES & TURNER 1980）を適用できよう。この理論から、自分がアイデンティファイしている他者や集団を他者称賛（高揚）することにより自分自身への評価を高めることが理論的に支持される（MILLER 1995；MULLEN and RIORDAN 1988）。逆に、嫌いな人（嫌悪的他者）を対象に原因帰属した場合、他者蔑視的になることが推察される。内集団外集団という区分をすれば、嫌悪的他者は外集団であるため、自己評価を高めるためには、外集団を低め、それにより相対的に内集団を高め、内集団の一員である自分を高めようとすると考えられる。このため外集団に対しては蔑視的帰属がなされることが推論できる。内集団における成員高揚的帰属と外集団に対する他者蔑視的帰属傾向は、齊藤・遠藤・荻野（2000）により既に実証されている。しかし、その実証的研究からは、このような内集団に対する奉仕的帰属傾向と外集団に対する蔑視的帰属傾向が、本人が内心からそのように帰属しているのか、それとも、自分の印象操作のためにそのように調査に答えているのかは明確ではない。そこで、本研究では、自分自身と同様に、自分の好意的他者と嫌悪的他者の入試の成功、失敗についても内心と発言の原因帰属の調査を行ない、内心と発言の差異を調べた。発言においては、相手が好意的他者の場合、他者称賛により内集団として自己高揚が図れ、聞き手に対する自分の印象を良くすることができるため、内心以上に他者称賛がなされることが自己呈示のストラテジーとして予測できる。他方、嫌悪的他者の場合、外集団の評価を下げることで、相対的に、自己高揚を図ることができるため、内心では嫌悪的他者に対して蔑視的に帰属することが予測される。しかし、発言においては、内心以上に、より蔑視的な帰属をすることは予測しない。それはそのような蔑視的帰属を発言する自分に対して、聞き手の自分に対する印象が悪くなることが容易に予想できるからである。このため、発言では、印象操作上蔑視的帰属は抑制されることが考えられる。つまり、嫌悪的他者に対しては、内心では、強く蔑視的帰属をするが、発言の際には、比較的、抑制的に蔑視的帰属を行なうと予測されるのである。

以上のことから本研究はつぎのような仮説を検証することを目的とする。

1. 自分自身への帰属においては、内心は自己高揚的傾向があるが、発言は自己卑下的傾向のほうが強い。

2. 好意的他者への帰属においては、他者高揚的傾向が強いが、内心よりも発言のほうが、さらにこの傾向が強い。
3. 嫌悪的他者への帰属においては、他者蔑視的傾向が強いが、内心よりも発言のほうが、この傾向は抑制される。

方 法

1. 調査対象者と分析対象者 日本人の大学生443名（男子226名，女子217名）。ただし，質問項目により回答可能な被験者は異なるので各項目により分析対象者数は異なる。また，全帰属要因への分配合計が100%にならない被験者は分析から除外した。
2. 調査法 質問紙調査法を用いた。質問紙は次のような構成の独自の調査表を作成した。
 - 1) 課題 大学入学試験（以下，入試と略す）と恋愛（紙面の関係で分析から除外）
 - 2) 成否 各課題の成功と失敗。
 - 3) 内心，発言 内心は自分の考え，発言は人に話すとき。
 - 4) 帰属対象者 自分自身，好きな友達（好意的他者），嫌いな人（嫌悪的他者）の3者。
 - 5) 帰属要因 齊藤・荻野（1997），齊藤・遠藤・荻野（2000）に準じて帰属要因は次の10項目とした。
a 素性，b 能力，c 性格，d 出身校，e 努力，f 対応，g 課題，h 状況，i 運，j 運命
- 5) 回答法 各項目ごとの100%分割法。
- 6) 質問 調査上の質問文の内容はおおよそ次のとおりである。入試，恋愛など自分の生活の中で起っている出来事の成功と失敗について考えること。そして，その成功失敗の原因，理由が何であったか（何であるか）を考え，それをa～jの理由の中から選択すること。そのとき原因理由は1つでも2つでもそれ以上でもよいこと。各項目内のトータルがそれぞれ100%になるようにすること。たとえば，2つだったら70%と30%といったように重みづけをして，それを数値（%）で記入すること。そのとき，自分の内心での考えを自分の考え（内心）の欄に記入し，その出来事について人に話すときの原因理由を人に話すとき（発言）の欄に記入すること。内心と発言の欄の数値は同じでも違っていてもいいことを教示する。次に，好意的他者と嫌悪的他者を1人ずつ選び，その2人の成功失敗の原因について自分自身のときと同様に自分の考えを内心欄に，その出来事について人に話すときの割合を発言欄に回答すること。
3. 手続き 大学の授業において，上記質問紙を配布し，回答させ，回収した。

結 果

入試の原因帰属の傾向について、入試に成功あるいは失敗した場合別、内心と発言別に各帰属要因の分割値の平均値と標準偏差を求め、自分自身、好意的他者、嫌悪的他者という3種類の帰属対象者の結果を表1～表3に示した。また、全データを概観した結果、全体として、b. 能力、e. 努力、i. 運の3要因に非常に多く帰属していることが判明したので、この3要因を取り上げ、帰属対象別かつ成否別の6ケースについて、内心と発言（2）×帰属要因（3）の2×3の分散分析を行った。その結果は表4～15に示されている。

表1 自分自身が入試に成功・失敗したときの原因帰属

帰 属 要 因	入試・自分・成功 N=235				入試・自分・失敗 N=154			
	内 心		発 言		内 心		発 言	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
a 素性生まれの良し悪し	2.9	10.0	1.6	7.3	2.6	11.2	1.7	6.7
b 才能能力素質の有無	15.9	21.3	11.3	21.6	15.1	21.8	16.7	25.9
c 性格性質の良し悪し	5.1	10.1	3.4	10.3	4.4	11.2	3.7	10.4
d 出身校の良し悪し	6.8	14.8	5.0	14.0	2.9	8.3	2.1	9.0
e 長期的努力の有無	24.9	25.8	22.5	27.1	38.7	32.9	38.9	34.3
f その時の対応の良し悪し	5.7	11.9	5.1	12.2	8.3	17.8	7.2	17.8
g 課題や相手の難易	7.3	15.9	7.4	17.4	7.0	13.7	7.1	15.0
h 環境の良悪や援助の有無	6.8	12.0	6.5	12.6	3.1	10.8	1.9	9.3
i 運の有無	20.5	23.3	32.6	31.8	13.0	20.2	15.3	23.8
j 運命縁の有無	4.1	9.6	4.7	12.5	4.9	14.9	5.4	16.7

表2 好意的他者が入試に成功・失敗したときの原因帰属

帰 属 要 因	入試・友人・成功 N=226				入試・友人・失敗 N=182			
	内 心		発 言		内 心		発 言	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
a 素性生まれの良し悪し	2.7	9.2	1.9	7.0	1.8	6.8	1.0	5.4
b 才能能力素質の有無	22.8	22.9	24.5	27.2	15.1	21.9	7.4	17.0
c 性格性質の良し悪し	4.8	12.1	5.0	12.8	5.7	15.5	5.3	16.9
d 出身校の良し悪し	4.9	14.1	3.2	10.9	2.1	7.1	1.8	6.7
e 長期的努力の有無	39.5	29.1	42.7	31.6	33.2	29.5	22.4	28.1
f その時の対応の良し悪し	3.2	8.2	3.7	11.0	4.6	10.9	5.4	14.2
g 課題や相手の難易	6.4	15.6	4.5	13.1	12.0	20.1	15.7	25.7
h 環境の良悪や援助の有無	3.6	10.3	3.5	10.7	3.2	8.8	5.5	15.2
i 運の有無	10.1	16.6	9.5	18.7	18.9	23.4	31.6	30.6
j 運命縁の有無	2.0	9.7	1.6	8.9	3.3	12.7	3.6	13.0

表3 嫌悪的他者が入試に成功・失敗したときの原因帰属

帰属要因	入試・嫌いな人・成功 N=211				入試・嫌いな人・失敗 N=163			
	内心		発言		内心		発言	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
a 素性生まれの良し悪し	3.3	12.9	3.2	13.3	4.7	14.0	3.2	12.4
b 才能能力素質の有無	13.4	22.4	15.3	24.5	29.4	31.1	23.7	31.2
c 性格性質の良し悪し	4.1	13.4	3.7	13.2	11.8	22.2	8.6	19.7
d 出身校の良し悪し	4.5	13.6	4.5	13.6	1.7	7.8	2.4	11.0
e 長期的努力の有無	19.3	24.8	25.3	29.9	27.2	30.8	23.4	29.3
f その時の対応の良し悪し	4.2	11.9	4.1	11.3	3.4	9.4	3.3	9.3
g 課題や相手の難易	7.7	17.0	7.4	17.8	7.5	16.7	9.8	21.8
h 環境の良悪や援助の有無	4.9	14.3	3.9	12.7	1.5	6.6	2.2	8.4
i 運の有無	36.1	35.6	30.0	33.9	10.5	20.0	19.4	29.0
j 運命縁の有無	2.5	12.4	2.5	11.1	2.4	11.6	4.0	14.3

以下、これらの結果を、自分自身、好意的他者、嫌悪的他者の順にみていく。

1) 自分自身の原因帰属傾向

自分が入試に成功した場合について、分散分析の結果、表4に示すように、内心・発言についておよび帰属要因について、さらにその交互作用について1%水準の有意差がみられた。

表4 自分自身の成功に関する分散分析表

要因	DF	Anova SS	Mean Square	F Value	Pr>F
個人差(S)	234	109386.20	467.46		
要因(A) 内心・発言	1	1012.78	1012.78	10.02	**
B①能力	1	2495.51	2495.51	24.69	**
B②努力	1	703.46	703.46	6.96	**
B③運	1	17318.32	17318.32	171.34	**
S×A	234	23651.72	101.08		
要因(B) 帰属要因	2	43511.43	21755.71	15.63	**
A①内心	2	9509.64	4754.82	3.42	**
A②発言	2	53506.29	26753.14	19.22	**
S×B	468	651285.91	1391.64		
A×B	2	19504.50	9752.25	37.37	**
S×A×B	468	122145.50	260.99		
全体	1409	970498.03			

** : $p < 0.01$

表5 自分自身の成功の帰属要因と内心・発言の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	15.9	11.3	**
B 努力	24.9	22.5	**
C 運	20.5	32.6	**
A/B	**	**	
A/C		**	
B/C		**	

** : $p < 0.01$

表1, 表5に示されるように, 内心ではその原因を男女とも長期的努力(24.9%)に最も多く帰属する傾向が見られる。このように自分の成功を内的要因へ帰属することは自己奉仕バイアス理論からみて, 自己高揚的帰属といえよう。一方, 発言ではその原因を運(32.6%)に最も多く帰属する傾向が見られた。このように自分の成功を外的要因に帰属することは, 自己奉仕バイアス理論からみて, 自己卑下的帰属である。そこで本研究で最も焦点としている内心と発言での帰属傾向を比較すると, 表5に示すように, 内心では努力に続き運への帰属が多く, 発言では運への帰属が最も多い。しかし運と他の2要因間には差がみられず, 能力と努力の間にのみ1%レベルの差が認められた。しかし発言では成功を自己卑下的に帰属する運への帰属は能力や努力への帰属よりも多いことが明示された。また, 内心と発言の間には能力, 努力, 運いずれにおいても1%レベルで有意な差がみられ, 内心では能力, 努力が高く, 発言では運が高いことが示された。この場合, 努力と能力は自己高揚的, 運は自己卑下的であるので, 内心においては自己高揚的帰属が多くなされ, 発言においては自己卑下的帰属が多くなされるということになる。この結果から, 仮説1を支持する傾向にあるといえよう。

次に自分が入試に失敗した場合は, 分散分析の結果, 表6に示すように内心・発言については5%レベルで, 帰属要因間については1%レベルで有意差があるが, この2要因の交互作用には差が認められなかった。

表1, 表7にみられるように, 内心, 発言ともその原因を努力(内心38.7%, 発言38.9%)に群を抜いて最も多く帰属する傾向が見られた。このように自分の失敗を内的要因へ帰属することは自己奉仕バイアス理論からみて, 自己卑下的帰属といえよう。また努力と, 能力あるいは運への帰属との差は内心, 発言ともに表7に示されるように, 統計的にも1%レベルで有意な差が示されている。しかし内心と発言の差は小さく, 3要因のうち, 運のみに5%水準で有意差が認められた。このように, 内心と発言に差が少ないという結果は仮説1を支持しているとはいえない。むしろ, この結果からは, 日本人が失敗したときの内心からの自己卑下的な帰属傾向が高いという, 従来の日本人の帰属傾向(鹿内 1983, 北山・高木・松本 1995)を支持しているといえる。

表6 自分自身の失敗に関する分散分析表

要 因	DF	Anova SS	Mean Square	F Value	Pr>F
個人差(S)	153	81884.17	535.19		
要因(A) 内心・発言	1	451.64	451.64	6.15	*
B①能力	1	201.30	201.30	2.74	
B②努力	1	5.19	5.19	0.07	
B③運	1	413.80	413.80	5.63	*
S×A	153	11236.36	73.44		
要因(B) 帰属要因	2	116526.88	58263.44	34.91	**
A①内心	2	62609.06	31304.53	18.76	**
A②発言	2	54086.47	27043.24	16.21	**
S×B	306	510643.46	1668.77		
A×B	2	168.65	84.33	0.39	
S×A×B	306	65918.35	215.42		
全体	923	786829.51			

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

表7 自分自身の失敗の帰属要因と内心・発言の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	15.1	16.7	
B 努力	38.7	38.9	
C 運	13.0	15.3	*
A/B	**	**	
A/C			
B/C	**	**	

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

2) 好意的他者の原因帰属

好意的他者が入試に成功した場合は、分散分析の結果、表8に示されたように、内心・発言間にも、帰属要因間にも1%レベルの有意差が見られた。しかし交互作用には有意差は認められなかった。

表2、表9に示されるように、内心、発言ともその原因を努力（内心39.5%，発言42.7%）に最も多く帰属する傾向が見られた。次いで、内心、発言ともその原因を能力（内心22.8%，発言24.5%）に多く帰属する傾向が見られ、この二つの帰属要因に群を抜いて多く帰属する傾向が見られる。表9に示すように、これらの二つの帰属要因と運との比較において、内心、発言ともに統計的に1%レベルで有意な差が認められた。この2要因は、いずれも内的要因であり、他者の成功を内的要因に帰属することは、他者高揚的帰属といえる。これは、好意的他者を高揚することを示しているが、このことは社会的アイデンティテ

ィ理論から指摘される内集団ひいき性の表れと見ることもできよう。また序で述べたように、友達という自集団の一員を他者高揚することによりその集団に含まれる自分を高揚する傾向が示唆されているということも推察できよう。この結果は、仮説2の前半部分を支持しているといえよう。また、表9に示されるように内心よりも発言のほうが努力への帰属が多く、統計的にも1%レベルで有意な差が示されており、仮説2の後半部分も支持されているといえよう。

表8 好意的他者の成功に関する分散分析表

要 因	DF	Anova SS	Mean Square	F value	Pr>F
個人差(S)	225	101547.64	451.32		
要因(A) 内心・発言	1	693.88	693.88	13.04	**
B①能力	1	336.50	336.50	6.32	*
B②努力	1	1131.03	1131.03	21.25	**
B③運	1	40.32	40.32	0.76	
S×A	225	11972.79	53.21		
要因(B) 帰属要因	2	222754.02	111377.01	81.58	**
A①内心	2	98588.57	49294.28	36.10	**
A②発言	2	124979.43	62489.71	45.77	**
S×B	450	614387.65	1365.31		
A×B	2	813.97	406.99	1.62	
S×A×B	450	112744.36	250.54		
全体	1355	1064914.31			

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

表9 好意的他者成功の帰属要因と本音・建前の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	22.8	24.5	*
B 努力	39.5	42.7	**
C 運	10.1	9.5	
A/B	**	**	
A/C	**	**	
B/C	**	**	

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

好意的他者が失敗した場合は、分散分析の結果は、表10に示されるように内心・発言について、帰属要因について、およびこれらの交互作用について、いずれも1%レベルの有意差が見られた。

表2、表11に示されるように、内心ではその原因を努力(33.2%)に最も多く帰属する

傾向が見られる。他者の失敗を内的要因に帰属することは他者蔑視的帰属といえ、この結果は好意的他者には他者高揚的帰属をするという仮説2を支持していない。一方、発言ではその原因を運（31.6%）に最も多く帰属する傾向が見られた。失敗を運に帰属することは他者高揚的帰属といえる。内心と発言での帰属傾向を比較すると、内心では努力不足に多く帰属し、発言では運の悪さに多く帰属している。表11からは、内心では努力不足、発言では運の悪さに最も多く帰属することが統計的に有意であることが示されており、内心と発言とでは帰属傾向に違いがあることが確認できる。この場合、努力は他者蔑視的、運は他者高揚的であるといえるので、仮説2の後半部分の好意的他者に対して内心蔑視、発言高揚の傾向が支持されたといえよう。また、表11からは加えて、このような内心と発言の帰属傾向の差異は、能力と努力における帰属においても統計的に1%レベルで有意な差が示されており、この結果も仮説2の後半部分を支持している。

表10 好意的他者の失敗に関する分散分析表

要 因	DF	Anova SS	Mean Square	F Value	Pr>F
個人差(S)	181	92918.22	513.36		
要因(A) 内心・発言	1	990.48	990.48	10.30	**
B①能力	1	5423.15	5423.15	56.38	**
B②努力	1	10553.85	10553.85	109.72	**
B③運	1	14850.62	14850.62	154.40	**
S×A	181	17409.52	96.19		
要因(B) 帰属要因	2	57768.27	28884.13	22.49	**
A①内心	2	33147.62	16573.81	12.90	**
A②発言	2	54457.78	27228.89	21.20	**
S×B	362	465023.40	1284.60		
A×B	2	29837.13	14918.57	40.44	**
S×A×B	362	133537.87	368.89		
全体	1091	797484.89			

** : $p < 0.01$

表11 好意的他者の失敗の帰属要因と内心・発言の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	15.1	7.4	**
B 努力	33.2	22.4	**
C 運	18.9	31.6	**
A/B	**	**	
A/C		**	
B/C	**	*	
	** : $p < 0.01$	* : $p < 0.05$	

3) 嫌悪的他者の原因帰属傾向

嫌悪的他者が入試に成功した場合、分散分析の結果は表12に示すように、内心・発言には差が認められず、帰属要因および交互作用に1%レベルの有意差が見られた。

表3、表13に示されるように、内心、発言ともにその原因を運（内心36.1%，発言30.0%）に最も多く帰属する傾向が見られる。また表13には、運と能力を比較すると、内心、発言ともに1%レベルの差で運が多く、運と努力を比較すると、内心において1%レベルの有意差で、運が多いことが示されている。このように他者の成功を外的要因に帰属することは他者蔑視的帰属であるといえる。この結果は仮説3の前半部分を支持しているといえよう。また、内心と発言を比較すると、能力、努力という内的要因については発言時の方が内心よりも多く帰属し、運については内心の方が発言よりも多く帰属している。これらの内心と発言の差は表13にみられるように3つの帰属要因すべてにおいて統計的に有意な差を示している。この結果は、仮説3の後半部分を支持しているといえる。

表12 嫌悪的他者の成功に関する分散分析表

要 因	DF	Anova SS	Mean Square	F Value	Pr>F
個人差 (S)	210	120116.82	571.98		
要因 (A) 内心・発言	1	105.23	105.23	1.21	
B①能力	1	369.73	369.73	4.26	*
B②努力	1	3762.09	3762.09	43.31	**
B③運	1	3943.36	3943.36	45.40	**
S×A	210	18240.60	86.86		
要因 (B) 帰属要因	2	74191.82	37095.91	21.25	**
A①内心	2	58380.65	29190.32	16.72	**
A②発言	2	23781.12	11890.56	6.81	**
S×B	420	733258.18	1745.85		
A×B	2	7969.94	3984.97	9.12	**
S×A×B	420	183546.72	437.02		
全体	1265	1137429.32			

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

表13 嫌悪的他者の成功の帰属要因と内心・発言の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	13.4	15.3	*
B 努力	19.3	25.3	**
C 運	36.1	30.0	**
A/B		*	
A/C	**	**	
B/C	**		

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

嫌悪的他者が入試に失敗した場合は、分散分析の結果、表14に示されるように、帰属要因と交互作用にのみ有意な差が見られた。

表3、表15に示すように、内心ではその原因を能力不足（29.4%）と努力不足（27.2%）の2つの要因に非常に多く帰属する傾向が見られる。内心における能力および努力へのこの帰属傾向は、運への帰属との間に1%レベルで有意差がみられる。しかし発言においては運との差は小さく、有意な差は認められなかった。他者の失敗を内的要因に帰属することは他者蔑視的帰属といえよう。この結果は仮説3の前半部分を支持しているといえよう。また、発言においては能力と努力の不足に多く帰属する傾向が見られたが、その傾向は内心より少なく、内心と発言の間に1%レベルで有意差があり、その分、発言では運の悪さに多く帰属する傾向が見られ、内心との間に1%レベルで有意差が認められている。他者の失敗をこのようにより外的要因に帰属することは他者蔑視的帰属を抑制しているといえる。これらの結果は嫌悪他者に対して他者軽視的ではあるが、内心よりも発言において他者蔑視的帰属が抑制されることを示している。この結果は仮説3の後半部分を支持しているといえよう。

表14 嫌悪的他者の失敗に関する分散分析表

要 因	DF	Anova SS	Mean Square	F Value	Pr>F
個人差(S)	162	94709.17	584.62		
要因(A) 内心・発言	1	7.39	7.39	0.06	
B①能力	1	2653.07	2653.07	23.23	**
B②努力	1	1160.20	1160.20	10.16	**
B③運	1	6538.65	6538.65	57.24	**
S×A	162	18505.11	114.23		
要因(B) 帰属要因	2	26415.40	13207.70	7.96	**
A①内心	2	34907.09	17453.55	10.52	**
A②発言	2	1852.84	926.42	0.56	
S×B	324	537686.60	1659.53		
A×B	2	10344.53	5172.26	10.61	**
S×A×B	324	158005.47	487.67		
全体	977	845673.67			

** : $p < 0.01$

表15 嫌悪的他者の失敗の帰属要因と内心・発言の交互作用の検定

	a 内心	b 発言	a/b
A 能力	29.4	23.7	**
B 努力	27.2	23.4	**
C 運	10.5	19.4	**
A/B			
A/C	**		
B/C	**		

** : $p < 0.01$

考 察

セルフモニタリング度が極めて高い社会とされている日本（SNYDER, 1987）においては、会話場面におけるその場での対人配慮が西洋社会に比較してかなり高いと考えられる。日常的な体験からも日本における対人場面での自己呈示の際、相手に対する印象をより強く意識して、相手の評価を考慮して、自己の呈示を操作すると考えられる。そのことは日本社会の対人場面での会話では自己卑下的な発言が多く見られ、それが良く評価されるということを示唆していると思われる。たとえば日本社会では、たとえ成功者であっても、その成功を自慢げに人に話すと鼻持ちならぬ人という低い評価をされるのが通常である。他方、その成功をたまたま運が良かったためとか、皆さんのおかげだというように自分以外の要因によると話すと周囲の人は、それを言葉どおり受け取るのではなく、逆に、奥ゆかしい、なかなかのできた人であるという高い評価を得ることになる。日本人の多くはそのことを知っているため、成功した場合、内心では成功を自己高揚的に内的要因に帰属していたとしても、発言では自己卑下的な、外的で変動的要因の運に帰属して話すことになると推察できる。このように考えると、この場合の自己卑下的言語表現は、表現されたままの自己卑下ではなく、周囲の自分への評価を高めるための印象操作としての自己呈示であるといえよう。少なくとも本心からの自己卑下ではなく自分の評価が低くなることから自分を守るための自己防衛的自己呈示といえる。本研究結果は内心では日本人も自分の成功に対しては自己高揚的であり、発言における自己卑下的表現は最終的には自己高揚のためのからめ手の印象操作による自己呈示に基づいた発言であるという傾向をうかがわせる結果を示しているといえよう。

では、日本人は言語表現上は自己卑下的であるが、本質的にはまったく自己卑下的ではないのかという点と本研究結果には日本人の本質的な自己卑下傾向も示されている。大学入試の失敗の原因帰属については内心、発言ともに最も多く自らの努力に帰属している傾向が示されている。つまり、自分の努力不足により入試に失敗したと内心で思っており、また、人に話すときも努力不足に最も多く原因帰属させて話をしている。この結果は、従来の西欧での帰属研究において主張されている帰属傾向とは明らかに異なっている。従来の研究では、失敗した場合の帰属傾向は、失敗からの自尊心の低下を防衛するために自己奉仕的バイアスが生じて、失敗の原因を外的な要因に帰属する傾向にあるとされている。今回の調査結果ではこの従来の傾向とは対照的な結果が示されている。このことは齊藤・遠藤・荻野（2000）において既に確認されているが、本研究では、内心、発言のいずれにおいても自己卑下的に帰属する傾向が最も多いことが明らかにされ、日本人は自分の失敗を印象操作としてではなく本質的に内的要因に強く帰属する傾向が明らかにされている。欧米と直接比較するデータは無いが、従来の研究成果から考察すると、失敗の帰属傾向には大きな文化差があることが示唆されるといいであろう。この点について、北山・唐

澤（1995）は、日本における失敗の内的要因への帰属は、単なる自己卑下、自己批判ではなく、それが自己向上に結びつくような帰属傾向であるとしている。このことは、帰属が、内的で安定的な能力ではなく、内的でも、不安定的な変動可能な努力要因であり、自分で将来、改善できる要因に帰属していることからうかがえると、次のように指摘している。

「欧米人は自己の望ましい属性（能力、才能）を肯定的に評価しようと動機づけられているのに対して、日本人はまず自己批判的に自己の望ましくない属性を見だし、これをなくするよう、実際の行動でそれに努めるように動機づけられている。つまり、欧米人の自己実現は自己高揚によっているのに対して、日本人のそれは、望ましくない属性を日常的な努力を通じて解消していこうとする行為のパターン（自己向上）によっていると考えられる」というのである。本研究の入試の失敗の帰属データから見ると、このことが追証されていると考えられる。

さて、本研究では自分自身への帰属だけでなく、他者（好意的他者と嫌悪的他者）への帰属も調査している。これにより、相互依存的自己をもつアジア文化圏における他者高揚つまり他者称賛帰属を通しての自己高揚をはかるという自尊心維持のストラテジーについて検討することが可能になる。好意的他者の入試の成功は、内心、発言ともに努力と能力といういずれも内的要因に帰され、好意的他者を称賛する帰属がはっきりと示された。これは前述したように、社会的アイデンティティによる内集団ひいき性の表れであるといえる。同時にその動機的側面は内集団のメンバーを高く評価することにより、その集団を高く評価し、それによりその集団のメンバーである自分を高く評価するという自己高揚の動機による自己呈示ストラテジーということがいえよう。当然、内心よりも発言のときの方がこの他者称賛の帰属傾向はより多くなる。言葉によって印象操作が行われるのである。それによって聞き手から、内集団の評価を高め、そこから自分自身への評価を高め、その結果、自己高揚を図ることができるからである。他方、嫌悪的他者の成功は、内心では外的不安定要因である運に最も多く帰属されている。これは内集団メンバーの成功のときとは逆に内集団ひいき性の逆、外集団蔑視性が表れるからといえよう。さらにはこれにより自己呈示による自己高揚が図られるからである。外集団のメンバーを高く評価することは相対的に自集団を低く評価することになり、自集団のメンバーである自分の評価を下げることになる。このため、たとえ成功しても称賛的帰属は行わずに自己評価を維持しようとする。さらには結果に示されているように蔑視的帰属をする。そのことによって、外集団の評価を下げ、相対的に自集団の評価を上げる。これにより自集団の評価が上がるとその集団メンバーである自分の評価も上がることになる。これにより間接的に自己高揚を図ることになる。本研究結果にもその傾向が見られている。ただし、嫌悪的他者への帰属には好意的他者への称賛の際と異なる点が見られた。それは好意的他者称賛のときは発言するときは内集団高揚の印象操作のため、内心よりも発言においてより内的な要因に帰属する傾向が見られたことである。しかし、嫌悪者蔑視のときは結果に示されているように、

発言のときは内心ほど外的要因には帰属せず、蔑視的傾向は抑制されていることが示されている。自己高揚という点から単純に考えると発言時には相手への印象操作のためにより蔑視的な帰属をするとも考えられるが、結果は逆になっている。発言時は蔑視的な傾向は抑えられ、方向としては高揚的になっている。そこには前述したように聞き手に対する印象が考慮されているのではないかと推測される。他者を蔑視するような発言は聞き手の自分への印象が考慮されていると考えられる。蔑視的発言は聞き手に対してはあまりいい印象を与えないであろうと配慮すれば、発言するときは内心で思っているときよりも蔑視的傾向を抑制すると考えられる。対人場面のその場にいる聞き手の持つ印象をより重視し、聞き手からの評価を重視したとすれば、発言の際は蔑視を抑制するということは、別の次元での印象操作のための自己呈示ストラテジーを示しているといえよう。

従来の欧米の研究では、事の原因帰属を人に話すときに自己評価を高めるための自己呈示がなされるが、このようなとき自己高揚動機に基づいて比較的ストレートな自己高揚的な帰属がなされるとされてきた。しかし日本のような平等志向の強い社会においては、単純に自分を高揚させるような帰属の発言は、他の人からの高い評価は得られず、それどころか、かえって評価を低められてしまいかねない。このような懸念から、発言においてはむしろ自己卑下的表現をし、それにより、周りの人から配慮のある人という高い評価を得て、それを通して、自己評価を高めるという間接的な自己高揚をする自己呈示を画すと考えられる。これが日本人の自己卑下的発言を生むことになるといえよう。このため、本研究で実証されたように、自分が成功したときは内心では自己高揚的な帰属をしていても発言時には自己卑下的な帰属をおこなうことになる。それが外から見て、言葉だけで判断すると日本人は自己卑下的であると映ることになる。他方で内集団の好意的他者に対してきわめて称賛的な帰属を行ない、友達集団という内集団の高揚を図る。他者称賛は自己称賛と異なり、周りの人から非難されることはない。むしろ人をほめるということでポジティブに評価されよう。この他者称賛により、自集団を高く評価して、そのハロー効果からその集団に含まれるメンバーの評価が高まり、それを通じてそのメンバーの一人である自分の評価を高めることになるのである。ストレートな自己高揚を嫌う日本人はこのような他者称賛を通して自己高揚していくという自己呈示ストラテジーをとる傾向が多いと見られる。これが外から見て言葉だけで判断すると日本人は極めて集団主義的と判断されることになる。しかし、好意的他者に対する称賛的帰属が印象操作によるものであると考えられるのは、内心思っているよりも発言するときのほうが、より他者高揚的になるという本研究の実証データで明らかにされたといえよう。逆に嫌悪的他者という外集団に対しては蔑視的帰属をすることにより、相対的に自集団の評価を上げ、自己高揚していくという自尊心維持のメカニズムをとっていると考えることができる。ただし、発言するときは聞き手の印象操作も考慮に入るため、他者蔑視傾向は内心の蔑視傾向よりは抑制されることになる。これも周りの人の自分に対する印象を良くするための言葉による自己呈示ストラテジーといえよう。

文 献

- CAMPBELL, W.K. and SEDIKIDES, C. (1999) Selfthreat magnifies the self-serving bias : A meta-analytic integration. *Review of General Psychology* 3 : 23-43.
- CIALDINI, R.B., BORDEN, R. I., THORNE, A., WALKER M.R., FREEMAN, S. and SLOAN, L.R. (1976) Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology* 34 : 366-375.
- CHOI, I. and NISBETT, R.E. (1998) Situational salience and cultural differences in the correspondence bias and actor-observer bias. *Personality and Social Psychology Bulletin* 24 : 949-960.
- DEPAULO, B. and KASHY, D.A. (1998) Everyday lies in close and casual relationships *Journal of Personality and Social Psychology* 74 : 63-79.
- 遠藤みゆき・齊藤勇 (1999) 大学生の大学入試・恋愛・就職の原因帰属 日本カウンセリング学会第32回大会発表論文集
- FLETCHER, G.J.O. and WARD, C. (1988) Attribution theory and processes. A cross-cultural perspective. In M. H. BOND (Ed.) *The cross-cultural challenge to social psychology*. Sage Publications.
- FRANZOI, S.L. (2003) *Social psychology* McGrawHill
- 古城和敬 (1980) 成功・失敗の原因帰属に及ぼす public esteem の効果 実験社会心理学研究 20 : 23-34.
- GILBERT, D.T. and MALONE, P.S. (1995) The correspondence bias. *Psychological Bulletin* 117 : 21-38.
- JONES, E.E. (1990) *Interpersonal perception*. W. H. Freeman.
- JONES, E.E. and NISBETT, R.E. (1971) *The actor and observer : Divergent perceptions of the causes of behavior*. General Learning Press.
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 (1995). 日本の自己の文化心理学 : I .成功と失敗の帰因. 心理学評論 38 : 247-280.
- 北山忍・唐澤真弓 (1995) 自己 : 文化心理学的視座 実験社会心理学研究 35 : 133-163
- 小菅幸一 (2002) 韓国大統領五話 朝日新聞 (11月6日発行)
- MARKUS, H.R. and KITAYAMA, S. (1991) Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review* 98 : 224-253.
- MILLER, A.G., JONES, E.E. and HINKLE, S. (1981) A robust attribution error in the personality domain. *Journal of Experimental Social Psychology* 17 : 587-600.
- MILLER, C. T. (1984) Self-schema, gender, and social comparison : 4 clarification of the related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology* 46 : 1222-1229.
- MILLER, S.A. (1995) Parents' attributions for their children's behavior. *Child Development* 66 :

- 1557-1584.
- MULLEN, B. and RIORDAN, C.A. (1988) Self-serving attributions for performance in naturalistic settings : A meta-analytic review. *Journal of Applied Social Psychology* 18 : 3-22.
- 村本由紀子・山口 勸(1997) もう一つのself-serving bias ―日本人の帰属における自己卑下集団奉仕傾向の共存とその意味について― 実験社会心理学研究 37 : 65-75.
- MYERS, D.G. (1999) *Social psychology* McGrawHill
- OAKES, P.J and TURNER, J.C. (1980) Social categorization and intergroup behavior : Does minimal intergroup discrimination make social identity more positive? *European Journal of Social Psychology* 10 : 295-301.
- 齊藤勇 (2003) 言葉による自己呈示の対人社会心理学的アプローチ ―内心と言行の不一致の心理メカニズムについて― 立正大学心理学研究所紀要 {印刷中}
- 齊藤勇・遠藤みゆき (1999) 日韓の帰属過程の比較文化心理学的研究 ―大学生の入試・恋愛・就職の成功・失敗について― 日本性格心理学会第8回大会発表論文集
- 齊藤勇・遠藤みゆき・荻野七重 (2000) 大学生の現実的課題の成功・失敗の帰属傾向 ―大学入試・恋愛・就職の原因帰属― 立正大学文学部研究紀要 16 : 1-22
- 齊藤勇・荻野七重 (1997) 運と運命への帰属 日本応用心理学会第64回大会発表論文集。
- 齊藤勇・荻野七重 (2003) 原因帰属における自己呈示としての自己卑下の発言 ―日本人は本心から自己卑下のものか― 日本社会心理学会第44回大会発表論文集
- SILVIA, P.J. and DUVAL, T.S. (2001) Predicting the interpersonal targets of self-serving attributions. *Journal of Experimental Social Psychology* 37 : 333-340.
- 鹿内啓子 (1983) 他者の成功・失敗の因果帰属に及ぼすself-esteemの影響. 実験社会心理学研究 23 : 27-37.
- SNYDER, M. (1987) Public appearances / private realities : The psychology of self-monitoring. Freeman. (齊藤勇監訳 カメレオン人間の性格 ―セルフ・モニタリングの心理学― 川島書店)
- WASTON, D. (1982) The observer: how are their perceptions of causality different? *Psychological Bulletin* 92 : 682-700.
- WEINER, B. (1980) A cognitive (attribution) emotion-action model of motivated behavior *Journal of Personality and Social Psychology* 39 : 168-200

本論文の一部は日本社会心理学会第44回大会 (2003年9月) にて発表している。

本研究のデータ収集において、玉川大学文学部助教授小嶋正敏氏のご協力をいただいた。記して感謝いたします。

おぎの ななえ (心理学)
さいとう いさむ (心理学)